

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル:

エコチル調査における化学物質曝露評価

和文タイトル:

エコチル調査における化学物質曝露評価

ユニットセンター(UC)等名: コアセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: 日本衛生学雑誌

年: 2018 月: 73 巻: 156

頁: 163

筆頭著者名: 中山祥嗣

所属UC名: コアセンター

目的:

エコチル調査における化学物質曝露評価の計画について述べるとともに、バイオモニタリングにおける精度管理上の問題にふれ、さらに今後検討すべき計画や課題について取り上げる。

方法:

エコチル調査における化学物質曝露評価の概要を記載し、進捗状況とともに紹介する。その後、エコチル調査における曝露評価の基盤であるバイオモニタリングの手法について解説し、最後に今後の課題をあげる。

結果:

エコチル調査では、過去にない量と数の生体試料を採取した。バイオモニタリングは、エコチル調査における化学物質曝露評価の最も重要な手段の一つである。エコチル調査で対象とする物質の級内相関係数は比較的低いため、そのような物質については、多数の試料の分析が必要である。また、複数同時曝露の影響評価にも、多数の試料の分析が必要であることがわかった。

考察:(研究の限界を含める)

バイオモニタリングを実施する際は、その精度管理や国際連携の重要性とともに、測定値の取り扱いや体内動態、個人内変動についても考慮が必要である。また、腎機能など交絡要因となりうる因子の測定も必要である。複数同時曝露の影響評価のための統計学モデルの開発や、適切な対象者数の設定も必要となる。

結論:

エコチル調査では、できる限り多数の試料を、できる限りた項目にわたって化学分析を行い、複数同時曝露の評価につなげることが必須である。